

トリブナ

ユースケ

—

新垣彰一は帰りのホームルームが終わると、友人のクラスメイト数人に挨拶をして、鞆を持って武道館へと向かった。何に対しても無闇に厳格な西浜高校の剣道部は、云うまでもなく遅刻にも厳しい。

「先輩」

鞆と、竹刀の入った布製の細長い袋を担ぎ、足早に階段を降りている途中、三階と二階の間の踊り場で、後ろから声をかけられた。

「陣内。今終わったのか？」

三階から急いで降りてくるのは後輩の陣内幸輔だった。一年生の中ではほぼ真ん中くらいの強さだが、熱心に稽古を続ける姿は、先輩達から評価が高かった。やや垂れた目、柔らかな口元など、人懐っこく見える外見も、他の部員から好感を持たれている理由の一つだろう。

「いえ、少し前に終わってたんですが、その……」

「ん？」

「ちょっと用事が。それで、遅れたんです」

「そうか。部活に間に合いそうでよかったな」

幸輔は相好を崩した。勿論実際には用事などなかった。階段の曲がり角のところで、彰一が降りてくるのを待っていたのだ。尊敬する先輩と一緒に歩く時間は、たとえそれが階段から武道館までの短い道程の間でも、逃し難い大切な幸福だった。

二人で歩きながら話をする。

「先輩も、ホームルームでカツアゲ事件の話聞きました？」

「ああ。もう六件目らしいな。お前も気をつけろよ」

「聞いた話では、狙われてるのはお金持ちの家の生徒ばかりだそうですから、僕は大丈夫ですよ」

「だからって、危なくないわけじゃないぞ」

「それに、僕達は剣道部員なんですから。むしろそんな不良が出てきたら、返り討ちにしてやりますよ」

「……あんまり無茶なことはするなよ。そういう奴らは常識が無いから、暴力に歯止めが利かないぞ。下手なことして怪我でもしたら、それこそつまらないだろ」

「わかってます。逃げるのが一番ですよ」

「そういうこと。——っと、悪い」

やや重々しく聞こえるクラシックの音楽が鳴った。携帯に着信があったのだ。西浜高校では、授業中に使用さえしなければ、生徒が携帯電話を持ち、使うのを別に禁止してはいない。あまりに煩いと注意されるけれども。

携帯を取ると、彰一は無然とした表情で携帯の画面を覗き込み、受信ボタンに触れてから耳に当てた。着メロと、画面に表示された名前で、二重に相手を確認してもまだ、何かの間違じゃないだろうかという期待が胸の中にあった。例えば、偶然にも落ちてたあの人の携帯を拾った人が、偶然電話帳の中から俺の番号を選んで、持ち主を探す為に掛けてきたとか……。

無論、そんな偶然は起こらない。スピーカーの向こうから聞こえるのは、聞き慣れた声だった。

「……はい、はい、わかりました。すぐですね？ ……はい、行きます」

再び画面に触れ、終話する。小さく息を吐くと、幸輔を見た。

幸輔は不安半分、心配半分の顔をしていた。その不安も、心配も、全て彰一に関するものだった。彰一は幸輔の予想通りのお願いをしてきた。

「ごめん、急用が入った。悪いけど、部長か村中先生に、今日は休むって伝えといてくれないか」

「はい」

またですか、という言葉に辛うじて飲み込み、幸輔は素直に頷いた。彰一は軽く手を上げると、すぐに背中を見せて立ち去った。幸輔はその背中を、先のままの表情で見つめる。しかし内心にはもう一つの感情、不満が渦巻いていた。

彰一の剣道部での評判はあまり良くない。いや、悪いと云ってしまっても過言ではない。それは彰一が、しょっちゅう部活を休むからだ。そしてそれでいながら彰一は、三年生でも勝てない程強いのだった。不真面目な人間が成功している姿を見て喜ぶ人間はそう多くないが、体育会系の部活だとその傾向は余計に強まる。

しかし彰一は決して不真面目な人間ではない。少なくとも幸輔はそう考えていた。ただ、部活に出れない日が多いだけなのだ。そしてそれは、彰一だけの責任ではない。

理想の先輩像を彰一の中に見つけてしまった、つまり彰一を尊敬してしまっている幸輔にとって、その彰一が剣道部で認められないのは歯痒い事だ。

西浜高校の生徒会には専用の教室が用意されている。スチール製の机と、同じくスチール製の折りたたみ椅子がそれぞれ数脚用意された、使いようによってはプレゼン会場にも会議室にもなるような、端的に云えばごく普通の教室だった。黒板だってあるし、スチール棚だって置かれているが、何より重要なのは空調が完備されていることだ。そしてその空調を扱う権限は、生徒会に一任されているのだ。

生徒会に一任と云ったって、設定温度を決めるのにいちいち会議を開くようなことなど勿論しない。この西浜高校では———というか「今の」西浜高校では、生徒会とは、つまり生徒会長の事だと言い切っても過言ではなかった。

「彰一くん、少し遅かったね」

安物のスチール椅子に、どう工夫すればそれほど優雅に見えるのだろうかという様子でゆったりと腰掛けた生徒会長、関悠美香は、少し息を切らせて生徒会室に入ってきた彰一に、悠然たる表情できっぱりと不満を述べた。もっとも彼女は、少なくとも彰一が知る限り、常にゆるりと構えていて、慌てたり驚いたりという態度を見せた事がない。

「すみません」

能う限り素早く生徒会室まで向かったつもりだったが、それでも、彰一は言い訳などしなかった。悠美香に言い訳などしても全く聞く耳を持ってくれないだろうし、それに加えて、彰一はどうも悠美香に頭が上がらないのだった。

剣道部の先輩達に嫉視される程の強さを誇り、それでいながらそういう先輩達を一向に相手にしない彰一が、たとえ相手が教師であろうとも、自分の方が正しいと思えば絶対に意見を曲げない彰一が、ただ一人悠美香を相手にする時だけは、何故か弱くなった。彼女に請われるままに生徒会に入り（しかも警備顧問とか云うわけのわからない役職で）、剣道部の練習を犠牲にしてまで呼出に応じて、そして毎回、彼女の考え出したよくわからない生徒会の「仕事」に従事するのだ。従事というより戎事になることも珍しくない。

心から申し訳なさそうに頭を下げる彰一を、一年生で書記の船井琴穂は、自前のノートパソコンの画面越しに、気の毒そうな目で見つめていた。眼鏡をかけた大人しそうな外見の彼女は、悠美香の無理難題に翻弄される彰一を、一番近くで見てきたのだった。そしてその度に、いたたまれなく思うのだ。彼女だって、生徒会長から無茶な要求を押し付けられることは多いのだが。

生徒会室に三人の生徒がそろった。この三人がいつものメンバーだった。生徒会の、というか生徒会長の活動は、生徒会長たる関悠美香が、彰一と琴穂を呼び出すところからはじまるのが常だった。何せ悠美香一人ではなににも出来ないのだから。

「ま、いいよ。掛けたまえ。早速本題に入ろう」

彰一は言われるままに空いた椅子に座った。三人しかいないのだから、席は余り返している。教室もやけに広く見え、この四分の一の大きさでもまだ三人で使うには広いだろうと思われた。まだ昼間だというのに、カーテンは全て閉められ、電灯が点いていた。もっともその理由は、天井から引き出された黒板の前の白いスクリーンを見れば想像がつく。

「さて、琴穂くんには少し説明したんだが、彰一くんはまだだね。最初から説明しよう」

悠美香は彰一をじっと見た。この整い、均整が取れ、気品溢れる顔で見つめられる事に、彰一は何時まで経っても慣れなかった。

「彰一くん、最近頻発してる恐喝の話は聞いているかい？」

「ああ、カツアゲ事件のことですか？」

「カツアゲ、か。やたらと隠語を使うのは関心しないね。まあ、呼び方はどうでもよろしい。ともかく、その事件だよ。知っているようだね」

「詳しい話は知りませんが、ウチの学校の生徒が、カツア……恐喝に遭ったって話は聞きます。それも、六人も」

「その通り。由々しき事態だよ、これは」

「そうですか」

彰一は曖昧に返事をした。悠美香は浅いアーチを描く口元を、小さく動かした。こういう微かな表情の変化で何か意志を伝えようとする事が、悠美香にはよくあった。言うまでもなく何を言わんとしているのか汲み取るのは大変難しい。同じ動作でも場合によって意味が異なる事が多いから、なおさらだ。

それで、二人は黙ってしまう。だが悠美香は自発的に口を噤んでいるのに対し、彰一の方は何も言えないと云うのが正しい。室内には、ただ空調の、そしてノートパソコンのファンの音だけが響いた。

「あの……、困りますよね、ウチの生徒が恐喝に遭ったら」

やっと彰一はそれだけ言った。悠美香はにこりとする。扱うのが容易ではない悠美香ではあるが、彼女の表情は比較的正直だ。

「そう、困るだろう」

「はい」

「つまりこれは学校の問題だよ。そういうのを解決するのは生徒会の仕事じゃないか」

「そういうものですか？」

「そういうものだよ。決まってるだろう」

悠美香の決然とした物言いに、疑問を差し挟む余地など一切ない。決めた事をやり通すのが悠美香だった。そして決めた事をやり通させるのも悠美香だった。

「そういうわけだから、第十七回、臨時生徒会会議を始めようか。議題はこれ、最近頻発する恐喝事件について、だ。琴穂くん、スライドを頼むよ」

「はい」

琴穂は手元のパソコンを操作した。電気が消え、天井から吊るされた映写機が、黒板前のスクリーンに映像を映しだした。プレゼンテーションソフトが起動された画面だ。

映し出されたスライドは良く出来ていた。聞けば琴穂は、今朝悠美香から作成を命じられ、授業を半ばサボって作ったらしい。琴穂に押し付けられる面倒な仕事は大抵こういったものだが、実際は、彼女自身も結構楽しんでこなしていたりする。

ちなみにこの話を聞いた彰一は、朝から決まっているならもっと早く連絡してくれても良かったのにとだけ思った。

「事の起こりは約二ヶ月前だ」

スライドには六つの日付が時系列順に表示されており、それぞれが六件の事件の起こった日たちを表している。悠美香が一番古い日付を指差し説明する。

「この日、最初の事件が起こった。帰宅途中のわが校の生徒が、三人の男に囲まれ、金品を奪われたんだ」

「恐喝ですね」

「そうだ。いわゆるカツアゲというやつだな」

彰一は流石に不満そうな表情を結んだが、悠美香はスライドの方を向いていて見てもいなかった。

「三人の男はいずれもTシャツにジーンズのような恰好をしていて、帽子を被っていたらしい。つまり顔はわからない。だが体格や髭から、成人であるのは間違いないようだ。それと、被害者の生徒はどちらかというとな大人しい性格だったから、この時は泣き寝入りするしかなかったらしい。しかし他の被害者が何人か出てきてからは、自分も被害を受けたと告白してくれたよ」

「被害額はいくらくらいなんです？」

と彰一が訊くと、琴穂が答えた。

「現金は二万円ちょっとらしいです。あと、時計とか、ゲーム機とかを盗られたそうです。足の付くカードとか携帯とかには手を付けていません」

「二万円……」

思わず彰一は復唱する。金持ちばかり狙われてるってのは本当だったんだな、と思った。

「我が校の校則では、ゲーム機は持ってきて良かったのだったかね？」

悠美香が質問した。琴穂は首を捻る。

「良いとも悪いとも、決まりには書いてなかったかと。でも、携帯は持ってきても良いですから……」

「日本の法体系はどちらかというとな大陸法系だが、この学校内では、英米法の原理もある程度通用すると私は考えるね。つまり、判例も法源になり得るのだよ」

彰一と琴穂は揃って顔をしかめ、同じ事を訊いた。

「どういう意味です？」

少し笑いを深めて、悠美香は両手をそっと組み合わせた。

「この場合でいうと、ゲーム機だが、以前教頭がとある生徒から取り上げたことがあるんだ。勉強に関係なく、また通信手段でもないため、ってね。この理屈だと、携帯と違って、ゲーム機はたとえ授業中に遊んだりせずとも、持ってくることで自体が許されていない、という事になるね」

「ええと、つまり、校則に違反してゲーム機を持ってきていたその被害者の生徒も悪い、ってことですか？」

そう彰一が言うと、悠美香は苦笑して見せる。

「良い、悪いの問題ではないよ。それに、私はそれほど融通の利かない人間ではない。ただ私が思ったのは、足が付かないものを盗るのなら詰めが甘いな、ということさ」

「ゲーム機から犯人が判るんですか？」

「そう。製造番号やMACアドレスからね」

「それって……一高校生には——俺達のことですけど——それを利用して捜査するのは無理でしょう」

「まあね」

彰一は流石に溜息を吐いた。どっと疲れがたまったような気がする。

「そのように起こったのが第一の事件。第二の事件はその二週間後だ。被害額も似たようなもの。そして第三の事件が——」

悠美香は指を動かし、指し示す日付を次々と変えてゆく。一件目と二件目の間は二週間、二件目と三件目の間は十日間。そして六件目まで、間隔は徐々に短くなっていった。

「……レーザーポインタ が必要だな。彰一くん、あとで買ってきてくれ」

「あ、はい」

「さて、この単なる日付の羅列を見るだけでも、犯行がどんどんエスカレートしているのは判るだろう？ 指数関数的とまでは言わないが。それで、この数字を見る限りでは……」

ちらりと目線で、悠美香は琴穂に合図をする。琴穂はスライドを切り替えた。横軸に日数、縦軸に件数を取った折れ線グラフが現れた。緩やかな上昇カーブを描いている。

「七件目はその位置に来るだろう。ほら、六件目のやや右上だ。もうそろそろだね」

「また誰かが恐喝されるってことですね」

彰一の言葉に、悠美香は頷いた。

「もちろん、指を咥えて見ていようとは思わないだろう？ だから我々生徒会が動くのだよ」

「あの、一応質問させて欲しいんですけど、そういうのは警察の仕事では？」

悠美香は小さく肩を竦めた。

「流石にこれだけ連発すると、警察もようやく重い腰を上げたようだがね。しかし被害者がいずれも男子生徒だからか、暴行を受けたりした者がいないからか、大した人員は投入してないらしい。それでもまあ、いずれは犯人を捕まえてくれるだろうが、私としては、これ以上一人でも被害者を増やしたいとは思わないのだよ」

「それは解りますけど……」

警察よりも早く犯人を見つけるなど、自分達に出来るのだろうか？ という当然の疑問を彰一は抱いた。しかしこの懸念は、悠美香も充分予期していた。

「なに、我々には警察にない利点がたくさんあるのだよ。それを利用して、犯人を捕まえてしまおう」

「捕まえるって、捕まえてどうするんです？」

「警察に引き渡すのさ」

この答えに、彰一は内心ほっとした。悠美香でも、そのくらいの常識（一般人が現行犯以外で逮捕したり、起訴したり裁いたり出来ないということ）は持っていると言ったからだ。

「さて、目標は決まったね。七件目の恐喝を阻止することと、犯人を捕まえることだ」

「……そのどちらかだけ、じゃ駄目ですか？」

悠美香は腕を組んで諭すように言う。

「無闇に目標を下げるのはよくないよ。自分が到達出来るラインを確りと見極め、そこを目標に設定することが大切なのさ」

つまり悠美香先輩は、俺達が次の事件を防ぎ、さらに恐喝犯達を捕らえることが出来ると考えているわけだ。彰一が常々疑問に思うことは、悠美香のこの自信がどこから沸いて出ているのか、だった。とかく彼女は、何か行かう時に迷うことがない。

彰一の悩みは、無論悠美香には全くの無関係だった。彼女は勝手に会議を進める。

「この事件には様々なアプローチの方法があるね。まずは地理的なことを考えてみようか。琴穂くん」

琴穂はスライドをめくり、説明する。

「これは、学校周辺の地図に、事件現場の位置を記したものです」

スクリーンに地図が映写される。赤い丸が恐喝事件のあった地点だ。六件全てが学校の近くと呼びうる位置で起きていたが、一見するとそれぞれの地点の配置に規則性は無いように見えた。

「学校の傍で起こっている、って点以外は、特に何もないみたいですね」

「特に何もないって？」

悠美香は人差し指を立て、左右に動かした。

「そんな事はないさ。こういうのは何らかの法則性に基づくものだからね。彰一くん、もっとじっくり地図を見てご覧よ。いや、地図だけじゃない。この範囲は学校の近くばかりだろう？ 事件発生現場の近くを知っていれば、その様子を思い出しながら見てみな」

彰一は悠美香に言われるままに、もう一度地図を、今度はそれを紙の上の単なる鳥瞰図ではなく、自分の周囲に現実に存在する世界として考えながら観察した。事件現場のうち半分くらいは、近くを通ったことがあった。

「……どこもここも、人通りの少なそうな場所ばかりですね」

「そういうことだよ。琴穂くん、次を」

スライドが切り替わり、また地図が出てきた。しかし今度の地図は、全ての道が赤から緑まで数色に色分けされていた。

「何ですか？」

「学校や警察が作成した、この辺りの安全マップを元に、各地域の安全度の高低で色分けして塗ってみた地図さ。言うまでもないと思うけど、赤に近いほど危険で、緑は安全だ」

緑色に塗られた道は、主に大通りだとか、近くに商店があるだとか、人通りの多そうな道。逆に赤いのは、人があまり通らない細い路地や、薄暗い林を抜ける道などだ。

「それでですね。これに先の事件現場の位置を重ねますと——」

と琴穂は言って、六件の事件現場を示す点を、その地図に重ねた。いずれも、赤の濃いエリアと重なっている。

「そりゃあ、俺だって、誰かを脅すなら人通りの少ない道を選ぶだろうな」

危険とされている道と、事件現場が重なっているのは、彰一には全く違和感がないように思えた。むしろ彼が問題だと思ったのは、わざわざ安全マップを作ってるのに多くの生徒が全く活

用していないことだった。もっとも彼だって、通学路に近道できる場所があったなら、たとえ薄暗かろうが細かろうが私有地だろうが、そこを通ったに違いないが。

「犯人もそう考えたわけだ。まあ考えただけでなく実行したんだが。そしてこれからも実行するだろう」

悠美香の言う意味が、彰一にも解った。再びスクリーンに目を向ける。

「七件目が発生するのは、この赤い場所のどこか、ってことですね」

「そのとおりだ」

言う意味はわかったが、しかしそれが何だと思わざるを得なかった。赤い地帯ははっきりいつてかなり広い。学校の周辺はこうも危険だったのかと思えるほどに。ビニールハウス群の間を抜ける道だとか、公園の林の中を抜ける道だとか、家と家の間の路地だとか、そういう危なげな場所がたくさんあって、そしてそういう道こそ、車が常にとっているような大通りよりも、生徒にとって便利な道なのだ。

「この赤いところ全部を警備するのは、学校の一学年の生徒を全員動員しなきゃいけないと思いますけど、生徒会にそういう権限がありましたっけ？」

「必要なら教師からそれを取り付けるさ。だが、最終手段だね」

最終手段には、困難だが一応実行可能な策を用意しておくものではないだろうか？ 彰一はそう思ったが、直接言ったりはしなかった。

「この事件は、生徒の側から調べる方が簡単だろうね。第二のアプローチだ。我が校の生徒の帰宅路を調査して——これは学校に資料があるよ——その中の、先の地図で赤く塗られた場所を通っているものを取り出し、被害者候補にする。それから、様々な条件を加えてふるい落としとしていこう。帰宅時間だとか、外見だとか。それから……」

「あの、すいません。それって、全校生徒に対してやるんですか？」

彰一がおずおずと訊いた。悠美香は、何故そんな当たり前なことを訊くのかね、わざわざ声に出して答えるのもばかばかしいよ彰一くん、とでも言うように無言で頷く。

しかし彰一はめげずに言葉を加える。

「すごく時間がかかりませんか？ それに、条件を絞っていても、やっぱり結構な数の生徒が残ると思うんですけど」

「それは仕方がないね。ともかく、被害者についてももう少し調べてみて、分析してみるよ。何か他に共通点が見つかるかもしれない」

「あの……」

と、申し訳なさそうに琴穂が割り込む。

「生徒の共通点って、お金持ちってことじゃないんですか？」

「あ、俺もそれ聞きました。みんなお金持ちらしいですけど」

「何だって？」

悠美香は怪訝そうな表情を作る。彰一は以外に思った。

「聞いてないんですか？」

「いや。誰がそれを言っていたんだい？」

「誰が、って……」

彰一と琴穂は顔を見合わせた。誰が、という話ではない。金持ちの生徒が狙われているという噂になっているのだから。

「——そうか。なるほどなるほど、裕福な生徒ね。彰一くん、悪いがそこのファイルを取ってくれないかな？」

そこの、というのは、壁際に置かれた棚だった。キャビネットと呼んだ方が良い。彰一は立ち上がり、棚の前まで行った。ファイルがぎっしり詰まっている。

「二段目にある、背表紙がSではじまるファイルだ。三冊全て」

目的のファイルは分厚かったからすぐに目に止まった。彰一を指名したわけがわかった。この三冊分の重量に耐えられる腕を持つのは、彰一だけだろう。彼は抱えるようにしてテーブルに持ち帰る。

悠美香はそのうちの一冊を受け取ると、中を開いた。彰一や琴穂も遠目から中身を見る。それは生徒の個人情報だった。

「ふむ」

何かを確認し、一人頷いて、悠美香は別のファイルをめくる。そして最後のファイルも。

全てのファイルを確認し終わると、

「すまない、彰一くん。片付けておいてくれ」

と命じ、椅子に深く腰掛けて、何か考えるような表情をした。重いファイルを頑張って元に戻す彰一の姿はおそらく見ていなかった。

「あの、先輩？」

あまりに長く黙っていたので、琴穂が声をかけた。悠美香は視線だけを琴穂に向け、ちょっと待ってくれ、とアイコンタクトで訴える。

やがて悠美香は、

「大衆の意見というのも、馬鹿にできないものだね」

と、ぼそりといった。

「は？」

彰一がその言葉の意味を確認しようとした時、悠美香は既に別の話題を口にしていた。

「今ざっと被害者の情報を見てみたが……きっちり計算してみないと何とも言えないが、おそらく有意だろうね」

「何のことですか？」

「帰無仮説が棄却されたってことだよ」

「もう少しわかりやすくお願いします」

「つまり、偶然じゃないだろうってことさ。裕福な生徒ばかりが狙われているのは。我が校の生徒の平均所持金額や、帰宅する生徒の危険地域を通る確率を考えるとね。しかし、私もまだまだだ。こんなこと、被害額を見た時点で気付いてもよかったのに……」

最後の方は聞こえないほど小声になっていた。悠美香はぶつぶつと何かを呟いている。

「ええと、すいません。それで結局、その結果が、俺達の仕事にどういう影響を及ぼすんでしょうか？」

「ん、ああ、それか。そうだね」

悠美香はにこりとした。

「良いとか悪いでいえば、私たちにとっては良い影響だよ。面倒な仕事がぐっと減る」

「次の被害者の特定がやりやすくなったってことですか？」

琴穂が訊くと、悠美香は笑みのまま首を横に振った。

「いや。考えてもみたまえ。裕福な生徒ばかり狙われているというのは、つまり、犯人は裕福な生徒を、それも人通りの少ない道を通して帰宅する生徒を選り出して、恐喝の対象にしているということだよ？　これが何を意味するか。ああ、彰一くん、悪いね、先のファイルをもう一度持ってきておいてくれ」

彰一の嫌そうな顔は一顧だにせず、言葉が続ける。

「第三のアプローチといこうか」

翌日の放課後、彰一は校庭の片隅に立っていた。余り目立たない、それでいて校舎の入り口も校門もよく見える位置である。まだ学校が引けてから然程時間が経っていない為、校庭は帰宅する生徒で満ちている。

暑かった。一応日陰に立ってはいたが、風が吹かないので蒸し暑く、首や腋窩に汗が溜まって大変不快だった。時々ハンカチを取り出して体を拭きながら、彰一は目的の人物が出てくるのを待った。先に帰られてしまったら元も子もないことは重々理解しているが、だからといってホームルームをサボってまで早くから立っている必要はないだろう、という怨みが頭の中をぐるぐると回る。勿論、こんな命令を出したのは悠美香だ。

結局、待ったのは三十分くらいだった。短くはないが、長いと文句を言うのも難しい微妙な時間。彰一は遣る方ない不満を心の底に抑えつけ、尾行を開始した。

道を歩きながら頭の中に地図を思い浮かべた。この辺りは緑色に塗られてたな、と思った辺りは、なるほど二車線の車道に併設された歩道であったり、また商店が連なる通りであったりして、常に人の気配があり防犯上安全に思えた。

前を歩く人物は、広い道から脇にそれ、脇道に入る。地図で赤かった道だ。

彰一はそのまま道を直進した。今いる道は住宅地の中を通るやや太い、車もよく来る道で、先の方には信号も見える。しかし今のところの曲がると、畑と家の間を縫うように走る細い小路に入るのだ。今の季節、畑には色々な食用植物（野菜とも言う）が繁茂しているから、視界は頗る悪い。

少し進んで、別の小路へ入る。そこで一旦立ち止まり、反対から見えないように気を付けつつ、今来た道を確認した。彰一と同じ制服の、つまり同じ西浜高校の生徒が数人歩いてきていた。

前に向き直り、小路を進む。幅は狭く、右手は家の塀で、左手は支柱に絡まって高く伸びる植物の畑だった。数十メートル行くと、また別の、やはりあまり広くはない横道に合流した。この道は、先尾行していた生徒が曲がった道と繋がっている。

畑の野菜の影に隠れて、身を屈め、彰一は待った。後ろから誰か来らどういいわけしようかと考えながら。

やがて、先程尾行していた男子生徒が通り過ぎる。彰一は彼の背中を見送った。実際のところ、彼に用があるわけではなかった。

しばし待つ。すぐに、もう一人別の、同じく西浜高校の生徒が歩いて来た。彰一は立ち上がった。

畑の影から、しゃがんでいた男が突然立ち上がったのだから、当然歩いて来た生徒は驚いた。だが、彰一の顔を見て何故か怯えたようになり、後ろを向いて逃げ出そうとしたのは、驚きだけではとても説明の出来る行動ではなかった。

「おい、ちょっと待て」

彰一は声を上げてその生徒を追いかけた。――追跡はすぐに終わった。剣道で鍛えた彰一の瞬発力を相手にしては、そこら辺の普通の高校生の逃げ足など話にもならない。勢い余って軽く体当ってしまったくらいだった。

逃げ出した生徒は彰一の思わぬ（彰一にとっても思わぬ、だが）攻撃で、地面に倒れてしまった。彰一は軽やかなステップを踏んで転倒を免れた。軽く息を吐き、予想外の暴力を振るってしまった驚きを沈めた。足元に転がる男子生徒を見下ろす。

「……俺はただ、話を聞きたかっただけなんだよ。ちょっとついてきてくれないか？」

*
**

男子生徒を学校まで連行しながら、彰一は昨日のことを思い出す。

「さて、犯人は我が校の生徒の詳細な情報を持っているわけだが……彼らはどこからそれを手にいれたのだと思う？」

この悠美香の言葉に、彰一と琴穂は揃って首を捻った。しかし答えが思い浮かばなかったわけではない。

「例えば聞き込んだとか、うちの生徒を尾行した、とかですか？」

「出来るかな？」

こういう挑戦的な反語を、悠美香はよく口にした。大抵の人間を苛立たせる驚きの精神作用を含んだ口調であろうが、彰一に限っては、相手が悠美香であるならば、こういう言い方も然程気にならないのだった。

「無理でしょうね」

と言ったのは琴穂だった。二人が自分を見るのを確認してから、根拠を述べる。

「だって、そんなあからさまに探るような人がいたら、すぐにバレますから。通学路の調査にしても、いくら人通りの少ない道だからって——いえ人通りの少ない道だからこそ、不審者がうろうろしてたら目立ちますよ」

「その通りだ。犯人は成人らしいが、見知らぬ成人が当下校時間に学校の回りをうろうろしていたと考えるのは難しい。よって、犯人たちが自ら情報収集を行ったと考えるのは無理がある」

「と、言うことは」

「誰か協力者がいるってことですね。学校内に」

彰一と琴穂が続けて言う。悠美香はちょっとした賞の一つや二つは取っている大学教授のように鷹揚に頷いた。

「それで、だ。校内の人間は大きく分けて二つだね」

「生徒と教師ですね」

琴穂が言った。

「校務員はどうですか？」

「生徒の情報を扱える立場にあるかね、彼らが？」

なるほど、と彰一は納得する。

「教師だったら、生徒の通学路が全部わかりますね。各生徒の通学路の道順の情報があるはずですから。それに、生徒の家の経済状況や、生徒自身の経済情報にも詳しいでしょう」

と琴穂。彰一は尤もな意見だと思ったが、悠美香はそうは思っていないらしい。

「いや、生徒が報告している通学路は必ずしも正しくないよ」

そして、やや大きく笑みを作る。皮肉な表情というやつだ。

「だって君たち、まさか学校に提出する通学路に、人の土地を使わせてもらいますとか、横断歩道の無い場所を横断しますとか、書かないだろう？」

「あの……でも、先輩、先までの話だと、俺達もそれを元に危険な場所を通して帰る生徒を探し出すつもりだったんじゃないんですか？」

「まさか。参考にはするけどね」

悠美香はファイルに目をやる。

「生徒の家の位置を見て、危ない道を通る可能性のある生徒を振るい出して……という使い方ができなかったよ。それでも、何も無いよりマシな情報だからね。だが、もうそんな面倒なことはしなくていい。

教師の可能性は少ない。正確な帰宅路を知るには、実際にその生徒を尾行してみるのが一番だろうが、教師にはそれが出来ない。授業が終わってすぐに帰れる教師はいないだろう？」

「つまり、協力者は生徒ってことですか」

「断定は出来ないが、可能性はあり蓋然性も一番高いね」

勿論悠美香は、この世に確実なものなど何一つ無いというスタンスを貫きつつ話している。

「それで、その協力者を捕まえて、犯人を見つけるんですね」

「流れる的にはそうなる」

「どうやって探します？ やはり被害者の接点ですか？」

琴穂が言っているのは、被害者のパターンから共通する因子——この場合は犯人に情報提供をしている生徒だが——を見つけ出す手法の事だった。悠美香は頷いた。

「とりあえず手元にある情報だけで十分だろう。生徒会のデータベースは中々のものだよ」

そのデータベースを整備したのは、また保守点検を行っているのは、勿論琴穂だった。

「学校の監視カメラの映像も回してもらおうよ。顔識別ソフトは入っていたね？　すぐにアルゴリズムを作るから、その間に情報を数値化するのだけやって欲しい。なに、明日の放課後までには、校内の協力者と、その彼が探っている次の被害者を割り出すことが出来るよ」

「それで、協力者を見つけてどうするんです？」

悠美香は決まっているだろう、という表情で答えた。

「現行犯逮捕さ」

結局、データの数値化とやらは夜遅くまでかかることになったが、悠美香の言う通り、放課後までには協力者と次の被害者を見つけることが出来た。彼女の言葉通りに言うなら、「その可能性が高い生徒」だが。

「二年四組の伊堂徳雄くんだね」

彰一が捕らえた男、伊堂は、使われていない空き教室に連れてこられて、悠美香から尋問を受けていた。生徒会室はこういう事には使わない。悠美香曰く、あそこは神聖な場所だそうだ。

中肉中背で、特に目立つような顔立ちや体型ではない男子生徒が伊堂だった。訝しさと不快感に眉を顰め、少し俯きがちに机に座っていた。悠美香は教卓の向こう側にまるで熟練教師のように堂々と立ち、伊堂の両脇には彰一と琴穂が立っていた。

「何故自分がここに連れてこられたか、解ってるね」

伊堂は外方を向いて黙った。黙秘権の行使のつもりだろうが、その態度自体が、自分に何か後ろ暗い事があると認めている事に他ならない。残念なことに、悠美香は被疑者の権利を尊重するつもりなどさらさらしないし、伊堂に公平な裁判を受ける権利が与えられているわけでもない。受けられるとすれば、それは検事が刑事と判事を兼ね、陪審員も傍聴者も弁護人もいないような異端審問じみたものだけだ（異端審問にすら弁護人が附くこともあったのに）。

「黙っていても得にならないよ、君。ネタは上がっているからね」

と、悠美香は机の上に書類の束と数枚の写真を投げた。ばさりと音を立てて机上に落とされたそれを、伊堂はちらちらと横目で見ると、

書類は、何のことやらわからなかった。見えるの是一片目だけだったが、わけの分からない数字で埋め尽くされているように見えた。もし他の紙も見れば、もっとわけが分からなくなっただろう。他の紙も、ほぼ全てが数字とグラフで埋め尽くされていた。

しかし写真には見覚えがあった。というのも、それは自分の写真だったのだ。画質から、最近のデジタルカメラや携帯電話で撮られたようなものではないのが判る。テレビでよく見る監視カメラの映像にそっくりだから、学校の監視カメラの映像をキャプチャしたものだということはずぐにわかった。だが、それが何を意味するのかまではわからない。

「何だよそれ」

ぼそりと、伊堂は訊いた。琴穂は軽く息を吐いた。ばかね。だんまりを貫き通す気なら、一見ワケがわからないものでも、何も言わない方がいいのに。

「上のは、君の写った写真だ。放課後、君が校舎から出てきて、校門まで校庭を歩こうとする場面のね。この写真で一番重要なのは君だが、ほら、君の先を歩いている彼ら。こっちも負けず劣らず重要だ。見覚えがあるだろう？」

校内に監視カメラは何台かあるが、ここで使われている映は、全て校門に設置された、校庭側を向いたカメラのものだ。ちなみにこのカメラ、常日頃からその存在意義を疑問視されている。こんな事でもないのに役に立たないのだから当然だ。

「……誰だよ」

伊堂はそんな質問を吐き捨てた。自分で答えを知ってでもいないと、こんな訊き方は出来るものではない。

「君が一番知っているだろう？」

悠美香はテンプレートに貼ってあるような言葉を重ねる。伊堂はまた黙ってしまう。どんなドラマの取調ベシーンでも、台本を見たら、こんな場面には黙ると書いてあるだろう。

別に目線をぶつけ合っているわけではないが、睨み合いのような時間が流れる。

先にしびれを切らしたのは悠美香だった。しかしそれは、彼女の敗北を意味しない。

「はぁ……。彰一くん、琴穂くん、悪いが少し席を外してくれないか？」

「大丈夫ですか？」

彰一は拒否的な訊き方をした。悠美香の物理的な弱々しさを、彼はよく承知していた。しかし悠美香はにこりと笑って見せる。

「平気だよ。私が言うのだから間違いない」

実際、悠美香には自分が安全だという確信があった。伊堂は、どう見ても暴力に走るような人間ではなかったし、また人に拳を振るうような勇気を決して持たない性格だった。これは数字を使った分析が示していたし、悠美香が現物を見て観察しても、間違っていないだろうと思われた。

彰一は琴穂を見る。彼女は静かに首を振った。それで彰一も諦め、大人しく教室をでる。しかし出しなに、伊堂を抑えつけるように睨むのを忘れなかった。

教室内は二人だけになった。

「さて」

悠美香は教卓の前にでて、そしてその教卓に座った。

伊堂は悠美香の足の辺りを見た、といっても別にスカートの中を覗こうとしたわけではなく、悠美香を見ようとしたが、目を合わせる勇気がなかったから、自然と視線が下がってその辺に目が行ってしまっただけだ。

「わざわざ人払いをしてあげたのだから、単刀直入に言ってしまおうか。伊堂くん、生徒会の情報収集能力も侮るべきではないよ？」

「……わけわかんねえよ」

「人の噂は恐ろしい、ってことさ。君、最近何かと濫費してるそうじゃないか。え？」

「っ！」

伊堂は思わず顔を上げた。そして悠美香の目を見てしまう。彰一すら直面するとたじたじになっってしまうあの目を。

「一ヶ月前までは、そんなにお金を持っていなかっただろう？ どこから臨時収入があったんだい？ 誰にもらった？」

「い、言う必要はないだろ」

「学校に隠れてバイト、ってわけでもない。いや、似たようなものなのかな？ さあ、教えてくれ。一月に七本もゲームを買うお金はどこから来たんだい？ ……これは質問じゃないよ。確認だ」

「証拠があるのかよ！ 俺がカツアゲ事件と関係してるっていう！」

「うん？」

悠美香は優しく微笑んだ。

「カツアゲ事件、か。いつそんな話したっけ？」

墓穴を掘ったことに気付いて、伊堂は顔面を蒼白にした。

悠美香は教卓から降りる。伊堂の肩に手を置き、口を耳に寄せた。彼女の髪が伊堂の鼻先をくすぐる。

「損得を考えなよ、伊堂くん。いずれ君の仲間は捕まるぞ？ その時、三人の犯行と言われるのと、四人の犯行と言われるの、どちらが良いのか。当たり前だが後者の場合、君は学校に居続けることはできないだろうね」

「だからって……」

「取引をしようと言ってるんだ」

悠美香は体を起し、数歩下がった。伊堂は彼女を見上げる。

「君は他の三人に脅されて、無理に犯罪の手助けをさせられたんだ。そうだろう？ だから、犯人たちのことを喋っても何の問題もない。いやむしろ、出来るだけ情報を提供してしまいたいと考えている。違わないね？」

「……………」

上大原は仲間二人と道を歩いていた。送られてきた情報は頭の中に入っている。

三ヶ月前、ゲームセンターでカツアゲをした時、高校生が意外と金を持っていることに気づいた上大原は、彼らを恐喝して小遣いを稼ぐことを思いついた。しかし無計画にカツアゲをしても効率が悪い事をよく解っていた彼は、知り合いの高校生を使って情報を集めて、効率的に金を集める方法を考え出した。

「……あいつですね」

仲間の一人、帽子を被った男が言う。上大原は頷いた。身長一九〇センチを超える彼は、三人の中でも一際目立った。別の意味で一番目立つのは、両耳に合計六個、鼻に二個、唇に三個ピアスを付けた、もう一人の仲間だろうが。帽子の男はこの中で一番地味だった。

「いつもどおりに行くぞ」

上大原は小さくそう言う。三人は、前を歩く制服姿の高校生へゆっくりと近づいてゆく。

知り合いの高校生とは、上大原が卒業した高校の在籍生で、半ば子分のような存在だった。見た目は全く不良風ではないのだが、自分の得になるなら倫理的に余り褒められないことでも平気でやるような男だったから、上大原も気に入り、そして信頼していた。

その高校生、伊堂を使って、上大原はまず生徒の情報を集めた。重要なのは金を持っていそうな、しかし気弱な生徒。そういう生徒は持ち物や行動が目立つから、比較的に見つけやすかった。そして次に、それらの生徒の帰宅路を調査した、というより、人通りの少ない場所を通るか、通るならそれはどこか、を調べた。これもそんなに難しくはなかった。家から学校まで、全て賑やかな道ばかりを使って通える生徒なんてほぼいないだろうし、よしんばいたとしても、その道は最短経路ではないだろう。効用は最大化される傾向にある。より短時間で往復出来る、しかしあまり安全ではない通学路が選択されるだろう。この国では、安全保障に掛けられる加重は少ない。

そういう調査にたっぷり一ヶ月をかけた後、上大原は計画を実行に移した。

三人は二手に分かれた。上大原とピアス男が右手に、帽子の男が左手に。そのまま前に行く生徒に接近する。

歩いている道は、何かの倉庫と公園の林に挟まれていて、地元の人でもそんなに利用しないような薄暗い細道だった。全国の不良が選ぶカツアゲしやすい道ベスト百、みたいな企画があれば、結構上位にくるだろう。

その道の半ばに来了。高校生はまだ後ろの三人に気づいていないようだった。三人は失笑を抑えて、素早く行動に移った。

まず上大原が前に出て、行く手を封じる。残った両脇の二人は、高校生より一歩分ほど後ろに下がって構える。この位置ならば、生徒が後ろへ逃れようとすれば、即座に両脇から確保することが出来る。勿論前へは逃げられない。完璧な包囲だった。

「よお、悪いな。金貸してくれねえか？」

上大原は、カツアゲの常套句を口にした。

恐喝計画は大成功だった。一件目の生徒は、大人しく全ての有り金と、金目の物を差し出した。現金だけでも二万円、ゲーム機や電子辞書や時計などを合わせれば五、六万にもなりそうだった。たった一度のカツアゲでこれだけ稼げるのだから、美味しいとしか言えなかった。

それでも上大原は慎重に事を進めた。二件目を始めるのに半月も待ったのがそれだ。そして生徒や、学校や、警察の対応が鈍いことを確認すると、徐々にペースを上げていった。恐喝した生徒全てから何万もの金品が搾り取れたわけでもなかったが、普通にカツアゲをするよりもずっと楽でずっと多くの収入があることは間違いなかった。

無論、こんなことをずっと続けていけるわけではないことも、上大原はよく承知していた。だがもうしばらくは、少なくともあと一ヶ月くらいは、この作戦で儲けられるだろうと踏んでいた。

その証拠に、七件目の今回ですら、こんな恰好の場所でターゲットを恐喝出来ているのだから――。

生徒は顔を上げて上大原を見た。上大原はやや身構える、というのも、今まで対象にした生徒は皆、恐怖と不安で俯くばかりだったからだ。

こいつは違う……。体つきはがっちりしてるし、立ち方もスッとしていて姿勢が良い。何かスポーツをやってるに違いない。何よりこの目付き。こんな風に真っ直ぐこっちの顔を見上げてくる奴は今までいなかった。くそ、伊堂の奴め、こういう手合いは金を持ってても除外しろと言っておいたはずなのに……。

上大原の表情の変化を、仲間二人は敏感に感じ取った。いつもはそのまま強気に脅迫し、金品を奪い取る彼らのリーダーが押し黙ってしまったのだ。二人は戸惑い、上大原を援護しようか、それともこのまま黙っていようか迷っていた。

しかしその前に第三者が介入する。

「そこまでだ。全員動くな！」

上大原と、他の二人は驚いて声の方を見た。囲まれていた生徒は、最初から承知していたように悠々と同じ方向を向く。二人の女子高生が立っていた。

それだけなら、上大原達も然程驚異に感じなかっただろう。しかし彼らを震え上がらせたのは別の音だった。全ての犯罪者が恐れる、あの耳の底に響くようなサイレン。否応なく白と黒で塗り分けられた官用車を（あと白と赤のものや、赤一色のものも）連想させるあの音だった。

悠美香の作戦は成功したようだった。

まず伊堂を通じて偽の情報を犯人らに流す。彰一が囷になって、犯人達を特定の場所に誘き寄せる。そして、適当な理由で警察に通報し、逮捕してもらう。

そんなタイミング良く事を進められるのか、とか、警察はちゃんと犯人を逮捕してくれるのか（証拠は？）、とか、そういう事を考えてはいけない作戦らしかった。実際、既にタイミングはミスっている。本当ならば、三人が恐喝を開始した時点で警官の一人や二人いないといけないのだし、そもそもサイレンを鳴らしてくれては困る。

「あの……先輩」

被害者役の彰一が、三人に囲まれながら訊いた。

「なんて通報したんですか？」

「男子高校生が恐喝を受けてる、って」

答えてくれたのは琴穂だった。悠美香は腕を組み、自分に対して微塵も疑いも抱いていない様子で答える。

「事実だろう？」

彰一は頭を抱えそうになった。だいたい考えて見れば、ここで先輩達が出てくる意味があるんですか？ 本来は警官と一緒に来てくれるはずでしょうが。

心のなかでボヤいたあと、彰一は自分の周囲の男達を見回した。どうして良いか本気で迷っているようだった。一時的な混乱だ。そして最初にその混乱から抜け出したのは、上大原だった。

「おい、逃げるぞ」

悠美香や彰一を完全に無視して、上大原は仲間二人に言った。警察が来る前に逃げるのが一番大切。実に適切な判断だった。しかしただ一つ間違えていたのは、彰一達が逃がしてくれると考えていたことだ。

「逃がしませんよ？」

彰一はやや慄然として言った。上大原達は無視して動き出そうとする。一介の高校生など眼中に無い様子だった。

小さく溜息を吐くと、彰一は一番近くにいたピアスの男の袖を引っ張った。ピアスの男はうざったそうに、その手を振り解こうとする。彰一は離さない。

「このっ」

ピアスの男は空いた方の手で彰一に殴りかかった。彰一はその腕を避け、同時に男の軸足に、脛の部分を狙って蹴りを入れる。男は痛みに体勢を崩す。掴んでいた手を離し、そのまま蟀谷を掌底で打ちつける。ピアスの男は仰け反って倒れた。

彰一は剣道の選手だが、だからといって竹刀でしか戦えないわけではない。

「お、おい！」

帽子の男は、仲間が突然倒されたのを見て、咄嗟の対応が出来なかった。彼らとて、喧嘩の経験は豊富だった。そしてだからこそ、あんな一瞬で気絶させられてしまうなどとは思わなかったのだ。

「先輩！」

琴穂は彰一を呼び、手に持っていた木刀を投げ渡した。彰一は受け取り、即座に構えて帽子の男に向き直る。

帽子の男は背筋に冷たいものを感じた。彰一の雰囲気は、先までとは一変しているのに気付いたからだ。自分が着ているのが薄いシャツだけだということを強く感じた。

「くそ、冗談じゃねえよ！」

帽子の男は叫んで、逃げようと左斜め方向へ走りだす。しかし彰一の木刀がうねるように動き、その逃走を制した。男の左手首を強かに打ったのだ。

帽子の男は悲鳴を上げる。彰一は続けざまに頭を打つ。勿論、かなり力を加減していた。竹刀ならともかく、木刀で本気で殴ると死んでしまう。

「待て！」

と声が聞こえ、彰一は残心を中断した。見ると、残った背の高い男——上大原が反対方向へ逃げ出しており、悠美香がその跡を追っていた。

「先輩!？」

彰一は慌てて、悠美香の跡を追いかける。何考えてるんですか！ あなたが行っても何にもならないでしょう！

走りながら、琴穂の方を振り向き、

「琴穂ちゃん、警察に事情説明よろしく！」

とだけ言い残した。琴穂は頷いたが、彰一はそれを見ていなかった。

頷きはしたのだが、目の前で伸びている二人を見ると、琴穂は嘆息せざるを得なかった。

「過剰防衛にならないかな？」

上大原ははじめ本気で走って逃げていたが、自分の後ろを付いてきているのが脇にいた女子高生だけだと気づくと、細道を抜け出し、倉庫の敷地へ入った辺りで立ち止まった。

勿論、悠美香はすぐに追いつく。この程度の運動でも、彼女には辛いものだったらしく、荒い息を吐いて呼吸を整えていた。それが終わると、上大原の方をキッと睨みつける。

「逃げられないよ」

「はん」

上大原は鼻で笑った。

「お嬢ちゃん、あんた一人で何が出来るってんだよ？」

言われて、悠美香はようやく自分が無力な事に気付いた。

上大原は一步前へ出る。悠美香は一步後ずさった。その弱きな態度に、上大原は思わずうっすらと笑う。この笑いが、悠美香の癪に障ったらしい。

「靴が汚れているよ」

悠美香に言われ、上大原は自然と自分の足元を見る。

「大して高い靴でもないのに、買い換えてもいない。そんなにお金が無いのかい？ ポケットが膨らんでいて、クジの端がはみ出ている。ハマっているのが宝くじだけってことはないだろう？

競馬なんかにも首を突っ込んでるんだろうさ。それに、その右手の親指の形、典型的なパチンコダコだね。少ない給料をどれだけつぎ込んだんだい？」

この物言いにむっとして、上大原はさらに一步前へ出る。悠美香は一步下がる。

「身長は高くせに、気は弱そうだ。安物のネックレスや指輪、腕輪をそんなにジャラジャラと着けてる。自分を大きく見せたいんだね。しかし、ほら、その左手。親指を隠して握っているだろう？ 君は本当は自分に自信がないんだ。それで、虚勢を張って、こんな無茶な行動に出たりする。おや？ 手を開いたかと思ったら、掌をズボンで拭いたね。緊張してるのかい？ 私に全て言い当てられて？」

「黙れ」

「嫌だね、黙らない。もっと当ててあげようか？ 君の……」

上大原はもう警告しなかった。つかつかと数歩近づくと、黙って拳を振り上げ、悠美香に殴りかかった。悠美香も流石に言葉は続けられず、目を瞑って首を竦めた。彼女という人間は、悪く言う他ないのだが、つまり、口だけなのだ。

振り上げられ、そして振り下ろされた拳は、しかし悠美香を打擲することはなかった。

「っ！」

痛みに、思わず上大原は拳を引っ込める。

駆け込んできた彰一の木刀が、上大原の手を打ったのだった。咄嗟だったので加減が出来ていなかった。骨に罅が入っているかもしれない。地味だがものすごく痛い一撃だ。

上大原は半身に構えて彰一を睨みつける。彰一は正眼に構え、上大原に相對した。

自分だけが武器を持っていることを、彰一は卑怯だなどとは考えなかった。試合ではないのだ。そして丸腰の相手だって無慈悲に叩きのめすような非情さも、彰一の中にはあった。上大原に対する多少の容赦も、彼が悠美香に手を上げているのを見た時点で消え去ってしまった。

上大原は先に動いた。身を低くして斜めに走る。正面からぶつかって行っても無駄だということとは悟っていたので、横からの攻撃、場合によってはそのまま逃げようと思ったのだ。

だがそんな小細工、彰一には意味がなかった。彼は最低限の動きで体を上大原に向けると、素早い動きで肩を狙い、撃った。痛みで上大原の足が緩む。続けざまに頭を撃つ。倒れた。

勝負はあっという間についた、というかそもそも戦いにすらならなかった。流石に殺さない程度の力の抑制は出来ていたから、上大原は気を失って倒れただけだった。彰一はゆっくりと構えを解く。それから、大きく息を吐いた。ある意味当然の感情であったが、防具を着けていない相手に木刀を振るうのは実に嫌な気分だった。

彰一は悠美香を見た。悠美香は感心した様子で彰一を眺めていたが、彼が自分を見る目が厳しい事に気づくと、少し臆したような表情になった。悠美香のこういう態度は珍しい。

「先輩、あまり無茶をしないでください。あなたが行ったって、何も出来ないでしょう」

多少荒らげられた口調で彰一は言う。普段の悠美香なら皮肉の一つも返すものだろうが、つい先暴力を振るわれかけた彼女は、大変弱気になっていた。

「すまない……ああいう手合を見ると、つい許せなくなってるね」

悠美香の正義感というのは独特だった。頭の回転は早いくせに、自分が間違っていると思うものを見ると、冷静な思考や理性的な判断などを全てかなぐり捨てて正しにかかってしまう。しかしその「間違っている」という判断の基準は、他人には判断し難い。そんな行為を許すのかと思うこともあれば、その程度で怒るのか、と驚くこともある。今回は比較的一般常識に近い判断だった。

「本当に気をつけてくださいよ」

正直に謝られては、これ以上怒るわけにもいかない。彰一はやや柔らかい表情でそう言い、悠美香を観察した。

「身体は大丈夫ですか？ 怪我してません？」

「いや、平気だ。心配してくれてありがとう」

そう言って笑う悠美香。彼女の笑みはとても正直だ。彰一も釣られて笑った。こういう表情を、悠美香は時々見せるのだが、それを見るたびに、彰一は、悠美香のありとあらゆる身勝手、傍若無人な態度を赦してしまう。

悠美香は笑みを収めると、倒れた上大原に近づいた。

「どうするんです？」

彰一が訊く。

「彰一くん、この男を仰向けにしてくれ」

「え？ しかし、頭を打ってますから。あまり動かさない方がいいですよ。あ、救急車を呼んでおかないと」

「それは警察に任せるさ。さ、構わないからひっくり返してくれ」

言われれば断れない。彰一は仕方なく、上大原の体を回転させた。

悠美香はポケットから薄い手袋を取り出すと、それを着け、上大原のジャケットの内側に手を突っ込む。

「何をするんです？」

「こういう人間はゲーム機なんかを常に身につけておくのさ。本質的に気が弱いから、他人との会話を避けたいことがある。そういう場合、『何かをしている人』にならなければいけないんだ。本を読んでたり、電話をかけてたり、ゲームをしてたり。……ほら、あった」

と、悠美香は内ポケットから携帯ゲーム機を取り出した。

「人と話たくない時、こいつの電源を付けて遊んでるふりをするってわけだ」

「……それで、何です？」

「盗られた金品の中にゲーム機があったろう？」

「それが、それだってことですか」

悠美香は頷いた。

「どうやって証明します？ あ、製造番号とか何とかアドレスとかで出来るんじゃないっけ？」

「え？ あはは」

苦笑して、悠美香は機体の裏を見せる。何かのキャラクターのシールが二枚、貼られていた。
「こんな判りやすい目印があるんだから、その必要もないね」

「先輩、聞きました？ 例のカツアゲ犯、捕まったんですって」

部活のため武道館へと向かう途中、幸輔は言った。

「ああ、聞いている」

彰一は苦笑して答える。

あの後、彰一と悠美香は琴穂と合流した。そして、倒れた二人の男を介抱していた警官に上大原の事を告げると、そのまま帰ってしまった。

三人は、恐喝事件で奪われた盗品を持っていたことと、被害者が顔写真を見て犯人だと証言したことにより、恐喝罪で逮捕された。警察は現場にいた他の三人——つまり彰一と、悠美香と、琴穂——も探しているらしいが、それが感謝状でも与える為か、過剰防衛の暴行罪で逮捕するためかはわからない。しかし然程本気では探していないらしい。

悠美香は勿論名乗り出ようなどとは言わなかった。欠点だらけの彼女だが、名誉欲が皆無なところは、彰一が無批判に尊敬している数少ない点だった。

「しかし、割りに合わない話ですよ」

幸輔は人事の気楽さで言った。

「どういう意味だ？」

「だって、犯人は成年だったんでしょう？ てことは、普通に罪に問われるわけじゃないですか。高校生をカツアゲしたって、大した稼ぎにはならないでしょうに、そんなつまらないことで前科者になっちゃうんだから。ちょっと損得勘定が出来たら、あんなこと絶対にしませんよ」

「なるほどな」

さんざん事前調査をして、ターゲットを厳選し、恐喝現場を選び抜き、四人で動いて、それで、一件につき現金二万円、現物を合わせて五、六万円。考えて見れば、随分とセコい仕事だ。というより、コストパフォーマンスが悪すぎると思うべきだろう。幸輔の言葉を借りれば、正しく割りに合わない。

「普通に仕事して、普通に稼いでればそこそこ幸せだったでしょうに、なんでそんな馬鹿なことをするんでしょうね？」

「さあね」

彰一は曖昧に答えたが、頭の片隅で、悠美香の事を考えた。

あの上大原は、少なくとも儲けがあったが、生徒会長は無給だ。先輩は、何であんなに職域をはみ出たようなことをするのかね。

そう考えていると、自分の事にも行き当たり、一人苦笑した。馬鹿な、それは俺も同じじゃないか。部活の先輩の印象まで悪くして、放課後の時間のほとんどを、生徒会に……というかあの人に捧げてる。それこそ、あの上大原にだってバカにされるような「割りに合わない話」だよな。

「何ですか、先輩」

突然笑った彰一を、幸輔は怪訝そうに見た。

「いや、なんて言うか。目的がお金だけじゃないんじゃないかな、って思って」

「スリルとか、ですか？」

「それもあるかも。いや、そういうことかもな」

口ではそう言いながら、頭の中ではそれよりも大きな理由を考える。

先輩は、上大原の性格を見栄っ張りだって表現してたな。本当は気弱で人見知りなくせに、虚栄心が強くて人の上に立ちたがる、って。だからじゃないかな。何か自分で大規模な計画を立てて、その通りに人を動かして、実行させて、成功させてみたかったんじゃないかな。

無論これは彰一の勝手な想像だ。実際どうだったかは今拘置所にいる上大原に訊いてみないとわからない。いや、彼自身よく解っていないのかもしれない。

——校舎を出て、武道館へと続く渡り廊下を渡っている時に、彰一の携帯が鳴った。聞き慣れたクラシックの着メロ。彰一は携帯を取り、画面に表示された名前を見て、慔然とした表情を作った。通話ボタンに触れて、耳に当てる。

幸輔は不満を顔に出した。彰一はそちらを向いていない。

「はい、ええそうですけど……今から、ですか？ ええと、はい。いいですよ。わかりました。では、すぐ行きます」

終話すると、携帯をポケットに戻し、彰一は幸輔の方を向いた。やや困ったような顔。しかしその困り顔には幸福感が混ざっていることを、幸輔は見抜いていた。

「悪いけど……」

「わかってますよ。先生と先輩には言っておきます」

「そうか、すまないな、いつも」

「いいですよ」

嬉しそうに笑う彰一を見て、幸輔も笑みを作った。彰一の笑いが決して自分に向けられていない事を知ってはいても、それでも幸輔は、自分の中に喜びが込み上げるのを防ぎ得なかった。そんな自分がどこか悔しかった。

「じゃあ、頼むな」

そう言って、彰一は背中を見せて立ち去っていく。その一度も振り返らない態度が、彼の中の剣道部の、そして幸輔の優先度を指し示していた。

幸輔は彰一が校舎の中に入り、角を曲がって見えなくなるまで、その背中を見送った。

そして溜息を吐く。彼は武道館の方へと歩き出した。足取りは先までと違い、鉛の靴を履いているかのように重かった。

生徒会警備顧問の新垣彰一が携帯を弄りながら生徒会室に入ってくるのを見て、生徒会長の関悠美香は両頬を膨らませた。送信ボタンに触れ、メールアプリを終了した彰一は、顔を上げて室内を見た。そこで、自分の方を見てくる悠美香に気付いた。

「彰一くん、お行儀がよろしくないね」

と、悠美香は睨み上げるようにして述べる。

「メールするななんて言わないよ。私だって使うからね。それに、うちの学校は携帯を持つてくることを、校内で使用することも含めて禁止していない。だから学校内でメールをしたってもちろん良いんだ。しかしだね、彰一くん、最低限のマナーというものはあると思うよ。少なくとも誰かが待っている部屋に入る時くらい、まず室内を確認し、挨拶をするものじゃないかな？」

「……もうしわけありません」

悠美香が愚痴を言う中、時間を無駄にせず椅子に座り鞆を置いていた彰一は、大人しく謝った。ホームルームが終わって、部活へ行こうとした時に先輩からの連絡が来たので、すぐに生徒会室へ行く為にメールで欠席の連絡をしてたんです——のような余計な事は言わない。

「まあ、いいよ。今日は時間通りだね」

「ええ」

連絡がいつもよりちょっと早かったですから、とも言わない。ちなみに連絡してくれたのは、今椅子に座ってラップトップを操っている船井琴穂だった。彰一はあとで琴穂に礼を言っていた。と思っていた。

「それで、今回の仕事は？」

「うん。彰一くん、君は超常現象をどう解釈するかね？」

「は？」

超常現象、とだけ言われても、漠然としすぎていてイメージが沸かなかった。おまけに「解釈する」と来た。

「信じるか、じゃなくて、ですか？」

「信仰はその人の自由だよ」

と、悠美香はいつもの説明口調になる。彼女の場合、説明というのは蘊蓄と同義である事がほとんどだが。

「それに、何かが存在しない事を証明するのはまず不可能だ。悪魔の証明ってやつだね。結局、人間は不確定な世の中を確からしさだけを頼りに生きていくほかないというわけさ。そしてその人生の道標——というよりルールブックが、常識と呼ばれているものってわけだね」

「それで、超常現象が何なんでしょう？」

彰一は無理にでも軌道修正をしようとした。悠美香は小さく肩を動かす。

「つまりだね、彰一くん。超常現象が実際に存在するかどうかは決定できないのだよ。シュレーディンガーの理論だと、観測した時点で存在非存在が決定されるわけだが、問題は、人間が行う場合、観測という行為自体が決して公平中立ではありえない点さ。同じ結果から違う結論を平気で導き出すのが人間なんだ」

「火の球を見て、人魂だって言う人と、プラズマだって言う人の違いですね」

琴穂がディスプレイから目を離さずに言った。悠美香は満足そうに頷く。

「で、その解釈を俺に訊いてみたわけですか？」

悠美香が頷くのを見て、彰一は疲れた息を吐く。

「俺は信じちゃいませんよ、そんなの」

「つまり君は、夜中に後ろから足音が聞こえた場合、妖怪の仕業ではなく気のせいだと考えるタイプだということだね」

「.....その状況なら、まず壁の反響とかを疑いますね。それに、幽霊に足は付いてないでしょう」

「その固定観念はいけないなあ。ま、いいさ。とにかく、今回の事件はそういう事なんだ」

「はあ」

彰一は適当に相槌を打った。そして琴穂を見る。悠美香も琴穂を見ていた。

「じゃあ、スライドを頼むよ」

「はい」

琴穂はいつも通りの手順で室内を暗くして、スライドを起動した。

「人魂です」

スライドを映して、一番に琴穂はそう言った。

「プラズマか幽霊か、の話？」

「いえ、今回の事件が、です」

スクリーンに画像が映し出される。学校の地図だ。周辺の地図ではなく、学校の見取り図。二階の廊下の辺りに小さな人魂のマークが付いている。人魂のマークというのは、別にウィル・オ・ウィスプだろうと鬼火だろうとどう呼んでもいいのだが、つまり、赤だか青だかオレンジだかブルーだかの色で、下がぐるぐるとなっており、上がよろんとなっているあれだ。

「そこで人魂が出た、って事？」

「ええ」

彰一は悠美香の方を呼んだ。

「これは……なんかその手の心霊現象研究家か、霊能力者か、超常現象否定派の大学教授か、周辺科学の専門家か、宗教家かペテン師でも呼んできたほうがいいんじゃないですか？」

「ペテン師以外は、まあ話を聞いてみてもいいかもしれないけどね」

悠美香は微笑した。ペテン師は、彼女でも御免らしい。彰一は宗教家も嫌だった。琴穂は周辺科学の専門家ならむしろ会ってみたいと考えた。そしてそういうどうでもいい事は、すぐに全員の頭の中から消えてゆく。

「ま、そこまでするような事件でもないだろう、と思うのだよ」

「思いますか」

「思うのさ」

勿論彰一は、何か証拠があるのでしょうか、というような疑問を込めて鸚鵡返ししたのだが、さらにもう一段返ってくるとは思いもよらなかった。

「で、根拠は？」

結局直接的に訊く。悠美香相手に修辞技法を使えば痛い目を見て疲れるだけだった。

「人魂が出る確率はあまり高いものではないからね。しかもこの場合——琴穂くん、スライドを次へ」

琴穂は忠実に正確に完璧にその命令に従う、と言っても指を少し動かしたただけだが。スライドが切り替わり、今度は学校を外側から撮った写真が出た。校舎を斜めから見たもので、校庭に面してずらりと並ぶ窓が一望できる。その窓の一つに丸が付けてあるのは、つまりそれが人魂の現れた窓という事だろう。

「そこで人魂が出たんだ」

「いつ、誰が見たんです？」

と彰一。答えたのは勿論琴穂だった。

「一昨日の夜中です」

「見回りの警備員？」

「うちの学校にそんなものを雇う余裕はないですよ」

それもそうか、と変に納得してしまった彰一だった。それに、学校に高価なものもないだろうしな。確かに、三年前のPCは決して高価なものではなかった。最新のGPUを要求するMMORPGを嗜むような人達から見れば、だが。

「目撃したのはその時学校の前を通ったとある生徒です。校舎の中で、ゆらゆらと動く人魂を見たそうですよ」

「夜中って、具体的に何時？」

「午後二時から三時の間だそうです」

「その時間帯に学校の前を通ったって？ 大した優等生だな」

「そうですね」

琴穂に対しても、修辞技法はあまり効果がないようだ。

「ええと、それで、話をまとめると、午前二時か三時くらいに、学校の中で人魂……てか光が見えた、ってこと？」

「中々簡潔なまとめ方だね」

と悠美香は褒めた。彰一は、悔しいことに、そう言われて少し嬉しかった。

「見間違えてことは無いんですか？」

彰一が言う。一番最初に疑うべき答えで、おそらく世の中の心霊現象の九割九分九厘と後九が七個くらいはこれで片付けられるだろう。

「監視カメラにも同じ光らしきものが映っていたから、間違いないよ」

「映像があるんですか!？」

驚きと不満を込めて、彰一は言った。驚きというのは、本当に何か光があったのか、というもので、不満というのは、それなら最初からその映像を見せてくださいよ、というものだ。

「これです」

琴穂はそう言って、スライドを進めた。映像が埋め込まれており、それが流れ出す。夜の学校だ。暗視カメラではないので、おまけに画質も悪いので、ただ暗い。ほとんど真っ黒に見える。しばらくたって、おそらく校舎の二階と思われるあたりに、結構はっきりと光が見えた。とても人魂などといえるものではなく、どちらかという鋭い印象を受ける光が窓の向こう側に揺らめいている。

その光は移動し、やがて消えた。少し待つ。また現れ、今度は先と反対方向に動き、そしてまた消えて行った。

「……これが、人魂ですか？」

「人魂というのは便宜上の呼称だよ」

いわゆる墓場とかに出てくるとされる人魂、を期待すると間違いなく裏切られる動画だった。かなり人工的な感じで、文明の力とか偉大なるエジソンとかそういう色を含んでおり、発光素子というか乾電池というか、もっとはっきり言うと、懐中電灯の臭がするというか……。

「ええと……まあとにかく、確かにこれは事件ですね」

「そうだろう？」

と相槌を打つ悠美香の顔は、自分の正しさを確信して疑っていない顔だった。つまり、いつもの悠美香の表情だ。

というわけで生徒会室を出て、三人は校庭へ行った。帰宅ラッシュはとうに過ぎており、部活動に勤しむ生徒ばかりが残っているので、三人はそれほど注目されなかった。

「あそこですね」

彰一は窓の一つを指差す。

「二階のあのへんだと、特別教室と職員室、あと校長室がある辺りです」

「重厚な教室の並びだね」

わけのわからない感想を述べる悠美香は、視線を下げて校舎の左側を見た。そちらは裏庭とでも呼ぶべき校舎と塀に挟まれた場所で、数本の木が植わっている他、花壇が作られているだけだ。今の季節はそれなりに鮮やかな花が顔を出しているのだが、残念ながらこの学校に花を愛でる趣味をもつ人間は少ない。

「行ってみようか」

と悠美香は、今彼女が見ていた辺りを指差す。

「はい？ 何ですか？」

「あの辺りが一番人目につかないからね」

それだけ言って、すたすたと勝手に歩いて行ってしまう。彰一と琴穂は慌てて追いかける。

右手に校舎、左手に植木のあるこの猫の額のような隙間は、はっきりいって日当たりが良くなかった。この辺りに植えられた花はかわいそうだな、と彰一は思う。自然の状態で、樹の根元に花畑が出来るものだろうか？

その場所で、悠美香は学校の塀をじっと見る。

「上に有刺鉄線が張られているわけではないし、ガラス片が埋め込まれているわけでもないんだね、うちの学校の塀は」

「はあ？」

またワケの解らない事を……という露骨な表情を作る彰一。悠美香はふと笑う。

「簡単に乗り越えられるって事さ。彰一くん、試してくれるかね？」

「え？ 俺ですか？」

「他にいないだろう。それともまさか、スカートを穿いている女の子にそんなことさせる気かね？」

「……わかりました」

と彰一が大人しく塀の方へ行こうとすると、悠美香は笑ってそれを止めた。

「おいおい、冗談だよ」

本来なら子供だけに許されるはずのこういう無邪気な残酷さに、彰一は酷く傷つけられたわけだが、ぐっと我慢して表情には出さなかった。しかし悠美香は追い打ちをかける。

「こんな真昼間にやらせないさ」

彰一は日が沈むのが怖くなった。

笑いを収めて、悠美香は花壇の方へ歩き、手前でしゃがんだ。じっと観察する。流石に虫眼鏡を取り出しはしなかった。

「何かありますか？」

と琴穂が訊く。悠美香は指でちょいちょいと合図をし、二人を招く。彰一と琴穂は悠美香の側に寄って、同じようにしゃがむ。

「何です？」

「見てご覧。幽霊に足が無いならこうはいかないね」

そう言って悠美香が指差す先には、足跡があった。幾本かの花は無残に踏みつけられ、美しい色とりどりの花卉を土で汚されている。

「……あの」

「うん？」

「これ、今回の事件に関係あるって言い切れるんですか？」

少なくとも彰一には、そういう確信は欠片も持てなかった。いくら人通りが少ないからといって、全く人が来ないわけではないし、その数少ない通行人の中に、何か思うところあって花壇の中に足を踏み入れる者がいないとも限らないのだから。ちなみに彰一は、植物を、特に花を無碍にするような人間とは絶対に仲良く出来ないと常々考えていた。

しかし悠美香には、確信こそなかったが、そこそこの自信があるらしいかった。

「壁からこっちへ一直線の足跡と、ここから壁への一直線の足跡。ちょっと泥遊びがしたくて花壇に入ったなら、こんな妙な足跡は残らないもんだよ」

「なるほど」

話半分に彰一は頷いた。無論だが、悠美香は彰一の態度など気にしない。

「足のサイズは二十三センチ……歩幅から見ると、身長は一五五センチくらいかな」

「女子ですかね」

と琴穂。悠美香はちょっとだけ肩を動かした。

「身長的高低で人を差別しちゃいけないよ」

「でも、十中八九女子ですよ」

「それには同意する」

悠美香は立ち上がり、

「行ってみよう」

と言って、花壇に足を踏み入れる。花を器用に避けて、奥の方、塀まで歩いて行った。彰一は、常識とかいうつまらない（と悠美香なら言うかもしれない）精神的障壁が邪魔をして、彼女に続くことが出来なかった。琴穂も踏みとどまっていたが、理由は彰一とは違うかもしれなかった。

しばらくして、悠美香が戻ってきた。

「壁に足跡があったよ。花壇の土が付いていたから、間違いないね」

「誰かが夜中、壁を乗り越えて忍び込んだって事ですか？」

この彰一の判りやすい要約を、悠美香も認めてくれたらしく、軽く頷いた。

「おそらくね」

「幽霊の正体はそれですか」

「それにもおそらく、としか答えられないよ」

琴穂は首を捻る。

「でも、その犯人の女子はどうして学校に忍び込んだんでしょう？」

「どうやって、って疑問もあります」

彰一が付け加えた。悠美香は二人の疑問に対して、神妙に頷いた。

「それを調べるのが仕事だよ。しかし……しかしね、仮説は証明しなければいけないね」

「は？」

意味が解らない表情をする彰一に対し、悠美香は事も無げに告げた。

「實際やってみるってことさ。この少女と同じようにね」

竹刀と竹刀がぶつかる音が、あるいは竹刀と面や胴がぶつかる音が響き、箠手とぶつかる音は聞くだけでも痛々しく、それらの音を押し出すように様々な掛け声が聞こえてくる。流石に突きなどという物騒な声はなかったが。

「面！」

彰一は凄まじい氣勢で面を打つ。絶妙な引き面で、相手は竹刀をやや斜めに構えたまま、ほとんど何の反応もできなかった。

審判が一斉に旗を揚げる。無論、彰一の白色だ。彰一も、相手も、元の位置へ戻り、蹲踞して納刀、少し下がって礼をした。良く訓練された一連の動作。

一試合終わったことになる。練習試合だからといって、勝って嬉しくないわけではない。負けて悲しくないわけでも無いだろうが。

次の試合が始まった。人数の多い部員を十数チームに分けていたから、広い武道館内でも一斉に試合をするわけにもいかない。必然的に見学しているチームが出てくる。言うまでもなく、今一試合終わったばかりの彰一は休憩だった。

正座して他の戦いを見ていた彰一の側に、剣道部一年の陣内幸輔が座ってくる。

「さすがですね、先輩」

こういう言わでもの事を口にするのは、幸輔にはよくあることだった。単純な、古臭い、お世辞のような褒め言葉でも、言われて嫌な気がする人は少ない。こういう性格だから、幸輔は嫌われないのだ。

「ん、ああ」

彰一は、こういうお世辞には無頓着だった。自分が強い事を、少なくともこの学校の剣道部の中では最も上手であることを充分承知していたから。幸輔はこういう態度にもめげず、話を続けようとする。

「でも今日は、少し遅れても、来れてよかったですね」

「どうかな？ 逆に先輩達の心象が悪くなったんじゃないか？」

こう口にする彰一の表情には、彼らしくない一種のひねくれが覗いていた。剣道部の他の部員達に嫌われる事を、彰一は何とも思わなかったが、しかし他人に嫌われていながら全く平気な人間など存在しない。

「そんな事ないですって」

と幸輔。この言葉は、実際は何の根拠も存在しない、ただの気休めだった。

彰一は苦笑して、何とも答えなかった。見学を続けようとして、武道館の中央の方へ視線を向ける。

その時、聞き慣れた着信メロディが聞こえた。

「誰だ！ 携帯の電源を入れっぱなしにしてるのは！」

最も早く反応したのは、厳しいことで有名な三年生の部員の一人だった。彼は部員全員を睨みつけるようにして館内を見回す。

「すみません、自分です」

と彰一は手を上げると、自分の鞆へ駆け寄った。

怒鳴った部員はバツの悪そうな顔をして、彰一から露骨に顔を逸らすと、それ以上何も言わなかった。彰一は、部内で嫌われているのは確かだったが、しかしその腕の確かさ故に、三年生

でも彼に強く何かを言うことが出来ないのだった。それが余計に、彰一の印象を悪くしている面もあるのだが。

部内の微妙な空気を見殺しにして、彰一は携帯を取る。メールだった。本文を確認すると、すぐに了解、とだけ本文に入れて返信した。そしてマナーモードにする。

「先輩、流石に不味いですよ」

追いかけて来た幸輔が小声で言う。

「ああ、解ってる。でも、どうしても確認しとかなきゃいけない用事だったから」

彰一も小声で答えた。

それは悠美香からのメールだったのだ。

あの足跡調査の後、悠美香は一旦の解散を告げた。と言っても、悠美香と琴穂は何かやることがあるらしいから、とりあえず彰一だけ自由にしてもらえたのだ。まだあまり時間が経っていなかったことから、彰一は途中から部活に参加した。

しかしその際、悠美香から言明されていたことがあった。それが、

「いいかい、メールで今後の事を通達するから、間違えなく確認してから、了解した旨を返信してくれよ」

というものだった。悠美香の性格上、すぐさま返信しないと許して貰えそうになかった。

そういう理由を知らない幸輔は、心配そうな顔をして言う。

「先輩、あんまりそんなことやってると携帯取り上げられちゃいますよ」

「……そこまでするかな」

「俺の隣のクラスの女子生徒は、授業中携帯が鳴ったって事で取り上げられましたよ。しかも二回も」

「二回？ 懲りずに二回もやったのか」

「ええ。しかも、二台ともまだ返してもらってないとか」

「は？」

彰一は驚いて幸輔を見る。

「取り上げられて、返してもらってからまた取り上げられたわけじゃなくて、別の携帯をそれぞれ取り上げられたってこと？」

「みたいです」

「何で二台も持ってたんだろ」

「さあ？」

考えたってどうなることではないから、不思議だね、程度でこの話題は打ち切りにした。しかし彰一はこう付け加えるのを忘れなかった。

「まあ、先輩達に俺の携帯を取り上げる権限はないよ」

だから部活中に携帯を鳴らしてもいい、とは勿論彰一だって考えてはいなかったが。

悠美香からのメールの内容は単純だった。しかし単純は平易と等しくはない。

夜中の一時に学校前に集合、という命令を見たとき、彰一はまず自分の眼を疑った。それから悠美香の常識を疑おうとしたが、はじめからそんなもの存在しないことに思い至り、全てを諦めた。

家に帰って、食事をして、風呂に入って、宿題をする。模範的な生活習慣を送る彰一の家では、零時にもなれば家族は皆寝静まっている。彼はズボンとシャツの上にジャケットを羽織り、こっそりと家を抜けだした。

「こんばんわ、琴穂ちゃん」

学校の、校門の近くで携帯を弄っていた琴穂に、彰一は声をかけた。琴穂は顔を上げ、ぺこりと頭を下げる。

「こんばんわ」

「寒くない？ 大丈夫？」

「ええ、平気です」

実際、琴穂はちっとも寒そうではなかった。細身のスラックスとブラウスを着て、その上からカーディガン、肩にストールをかけていた。

「大変なことになったね、こんな時間に」

「はい。でも、少し楽しいです」

「ああ、それは俺も、ちょっとだけ同意」

そう言い合って、二人して苦笑した。

「先輩は？」

「まだです。でも、すぐ来るでしょう」

それはそうだ、と思った。呼び出しておいて遅れるなんてあんまりだが、悠美香が相手ならそれも当然のように思える。

彰一は琴穂の持っている携帯を見た。

「琴穂ちゃん、それ、前持ってたのと違うね」

「これですか？ ええ、そうです。でも、OSは同じなんです。先輩が前見たのはこれですよね？」

と琴穂はポケットから別の携帯を取り出す。正しく、学校内で彼女が使っていたものだ。

「君も二台持ってるんだ」

「全部で四台持ってますよ。こっちは通話と音楽プレイヤーに使って、こっちは、ハードキーが付いてますから、ファイルの編集や簡単なプログラミングに使います。で、ガラケーは電子マネーと……」

「最近、複数台持つのが普通なのか？」

彰一は琴穂の言葉を遮って言った。琴穂は首を傾げる。

「そうではないと思いますけど。普通は一台で充分でしょう。先輩の知ってる人で、二台以上持ってる人がいるんですか？」

「いや、聞いた話」

と彰一は、幸輔に聞いた女子生徒の話をした。琴穂も一年生なのだから、噂くらいは聞いたこ

とがあった。

「あ、知ってます、その話。一限目の授業中に携帯が鳴って、取り上げられて、三限目には間違えて音楽をスピーカで流しちゃって、取り上げられたんですよ。それで、普通なら放課後に返してもらえるんですが、一日に二回も同じ事するなんて、って事で、返してもらえなかったとか」

「なんか間抜けな話だな」

「私もそう思いました」

「しかしその子は、二台も持っててどうする気だったんだろ？」

「回線の問題じゃないですか？ 同じ電話会社同士だと通話料安いですし、電波が入りにくいところとかありますし」

「あ、なるほど」

彰一は以前合宿に行ったとき、何人かの部員の携帯では電波が入らず使えなかったのを思い出した。もっともその合宿では、朝から晩まで練習していたので、携帯が使えるようが使えまいがあまり関係なかったのだが。

雑談をしているうちに悠美香がやってきた。時間を少し過ぎていたが、彼女の恰好を見ると、彰一と琴穂にはそんな文句を言う気力もなくなった。

「やあ、彰一くん、琴穂くん。そろってるね」

と軽く手を上げる悠美香は、フレアスカートにブラウス、ベストを着け、その上からケープを纏っていた。

「あの、先輩」

彰一は顔を顰めて言う。

「先輩の気が変わったって言うんならすごく嬉しいんですが.....、俺は、学校に忍び込んでみるって聞いて、こういう動きやすい服装で来たんですよ。多分、琴穂ちゃんも同じです」

「お、気が利くじゃないか。二人とも、その服装は実に適切だね」

一番適切でない恰好の悠美香が偉そうにそう言う。

彰一は黙って悠美香を、正確には彼女の服を指し示した。人差し指を向けるような失礼なことをは当然せず、掌を上に向けた手を使った。

「.....？」

「その服装は、ええと、どういうことでしょう？」

「ああ、これかね？ どうかね？」

と少し体を斜めに向けて見せる悠美香。どういうわけか微妙に照れたような態度を取っていたのが、彰一には理解不能だった。

「それで塀を乗り越える気ですか？ 昼間、スカートだからどうこうって俺に言ったじゃないですか」

「あ、そういう事を言ってるのか。それについては安心したまえ」

全く安心などできなかったが、これ以上何か言って満足行く答えが返ってくるわけもないので、彰一は黙った。この先も長そうだ。無駄な体力は使わないにこしたことはない。

「先輩、私からも訊いてよろしいですか？」

「何だい、琴穂くん」

「学校のセキュリティには警備会社が入ってるはずですが、大丈夫ですか？」

「ああ、良い所に気付いたね」

悠美香は学校へ視線を向ける。

「普通なら、そうだ」

「普通ならって、うちの学校は普通ですよ」

と彰一は突っ込む。有名な警備会社のシール（？）が扉に貼ってあるのだから。

「まあ、警報が鳴ったなら逃げ出せばいいさ」

「ちょっと待ってください、先輩。それは聞き捨てなりませんよ」

「捨ててくれ。さあ、行こう」

そう言って、悠美香はすたすたと歩いて行ってしまった。彰一は果てしなく気持ちが重くなった。もしかしたら明日にでも教諭陣にどやされるハメになるんじゃないだろうか、という心配である。琴穂を見てみると、彼女は悠美香とは別の意味で何を考えているか解らず、普通に無表情だった。

で、三人は塀の前に立つ。コンクリート製で、一六〇センチくらい高さだとわかる。というのも、身長一七七センチの彰一のちょうど口元の辺りまでの高さだからだ。乗り越えるのは難しい。

「さ、彰一くん」

と悠美香は振り向いて言った。口元の微笑、真っ直ぐに彰一を見つめる瞳、自分の腰に両腕を当てるポーズ。

彰一は大きく溜息を吐く。これは彼に可能だった唯一の抵抗だ。

「わかりました」

彰一は塀に手をかける。昼間の悠美香の話を思い出した。有刺鉄線やら、ガラス片やら——本当にうちの学校は普通でよかった。

両腕に力を込め、懸垂の要領で体を持ち上げる。塀に足をつく。

「あ、ちょっと待ってくれ」

悠美香が声を抑えて叫んだ。彰一はびくりとして、足と腕だけで体を支える不安定な恰好で静止する。

「琴穂くん、ここを見たまえ」

と悠美香が指さしたのは、塀の、彰一が足をつけているところより少し下の場所だった。

「足跡、ですか？」

「かなりうっすらだがね。誰か前に、同じように壁を乗り越えたんだよ」

「小さいですね」

「ああ、彰一くんと比べるとね。多分二十三センチくらいだ。花壇にあったのと同じくらいの大きささ。——彰一くん、どうしたんだい？ 早く登ってくれ」

理不尽に慣れてきたら人間として終わりじゃないだろうか？ みたいな事を考えながら、彰一は塀の上へ登った。そのまま学校の敷地内へ飛び降りようとしたが、悠美香に止められる。

「彰一くん、引き上げてくれ。まずは琴穂くんから」

そういう事か、と彰一は納得した。琴穂と視線が合う。彼女は頷いた。二人は手を伸ばし合い、掴む。彰一は腕に力を込め、琴穂を引き上げる。彼女はそれほど運動神経が悪いわけではないらしく、上手に体に力を入れて、彰一と同じように塀の上へ乗った。

「お先に失礼します」

と琴穂は言って、学校内へ飛び降りる。次は悠美香だった。

悠美香は両腕を差し出してきた。彰一は片腕だけだしてそれを握り、悠美香も握り返す。驚くほど握力が低い。頑張って引き上げようとするのだが、上手く足が塀にかからない。しばらくじたばたとしていて、やっと足が塀の溝に引っかかり、体が少し持ち上がった。が、それ以上自力で登ることは難しそうだった。彰一はそこから引き上げようとする。

「い、痛い痛い！ 彰一くん、少し加減してくれ」

そんな無茶な、と泣き言は言わない。ただ彰一は困った顔をした。しばらく悠美香の有様を観察する。

「あの、先輩はそこに残る、ってわけには？」

「いかないね」

駄目か、と息を吐いた。もう一度悠美香を見る。頭の中でシミュレーションする。……うん、

何とかかなりそうだ。

「先輩、ちょっと失礼しますよ。少し我慢してくださいね」

「痛いのは嫌いだな……」

この悠美香の言葉を、彰一は喜んで無視した。

再び手と腕に力を込め、悠美香を自分の前まで引き上げる。彼女は表情を苦痛に曇らせる。彰一はもう片方の腕を出し、掬うように悠美香の腰へ回した。そしてそのまま、二点で保持して塀の上に引き上げる。自分が塀から落ちないようにバランスを保ちながら、である。数秒の間だったが、不安定な状態に本当にひやりとした。が、結局は成功し、悠美香を引き上げることが出来た。

「さ、先輩。飛び降りるのは出来ますね」

「あ、ああ。多分ね」

悠美香はまだ驚き覚めやらぬという様子だったが、彰一に続いて、何とか飛び降りた。勿論上手く着地は出来なかったので、彰一が体を支えた。

琴穂はもう花壇の向こう側へ出ていた。二人もすぐに追いつく。

「侵入しましたね」

と琴穂は現状を的確に要約した。悠美香は、先の痛みも恐怖もすぐに忘れたのだろう、嬉しそうに笑って言った。

「ああ、そうだ」

彰一はその笑顔を見て、また新しい不安がもたげてくるのを感じた。まさか先輩、事件とか関係なく、単に夜の学校に入ってみたかっただけなんじゃないだろうな。

「さて、彰一くん。なぜ犯人がこの位置を選んだかわかるかね？」

「はい？」

突然そんなことを訊かれて、彰一は咄嗟に答えられなかった。別に悠美香も答えを期待してはいなかった。

「すぐそこから校舎内に入れるのだよ。ほら、その扉だ」

「ああ」

そこにはスチール製の扉があった。一階の廊下の突き当たりにある扉で、教諭や校務員が勝手口として使用している。別に生徒だって使ってもいいのだろうが、下履きの靴が無いのであまり用のない場所だった。

「でも、鍵がかかってるでしょう？」

「私は生徒会長だよ？」

と口にする悠美香は、社会的地位を悪用する大衆小説の悪役そのもののように見えた。彼女がポケットから出したのは、一本の鍵だった。

「……先輩」

流石の彰一も、非難するような眼を向けた。悠美香は他人の悪意を感じない体質らしく、無視した。

「さ、入ってみよう。ちなみにこの鍵は職員室の鍵掛に普通に掛かっているものだよ。これは合鍵だがね」

「だからって、勝手に盗ってきていいわけじゃありませんよ」

「そういう問題じゃないさ」

悠美香は暗闇の中、月明かりだけを頼りに鍵穴に鍵を挿し込みながら言う。

「二人とも、考えてみたまえ。学校の正面玄関の鍵が、鍵掛に掛かっているかね？」

「え？」

そう言われて、彰一は職員室の大きな鍵掛を思い浮かべてみたが、ちょっと思い出せそうになかった。特別教室や体育倉庫の鍵なら、彼も先生に言われて使ったことがあり、また元の場所に返したことがあったが、他の鍵になど目もくれなかった。

「そういう鍵は、校務員の方か教頭先生あたりが管理してるんじゃないですか？」

と琴穂。カチリと音がして、鍵が開いたことを伝えた。

「そういうこと。普通の生徒が、比較的容易に鍵を盗める校舎内への出入口といえ、ここしかないのさ。……入ってみようか？」

ここまで来ると、退くわけにも行かなかった。

そして結論からいうと、三人はただ校舎の中に入っただけで終わった。

何もなかったからだ。犯人がまた来るわけでも無く、警報が鳴るわけでもなく、無論走る人体模型やトイレの花子さんや音楽室で勝手に弾かれるピアノなんかも無かった。調べてすらいないが。ちょっと廊下の方へ入って、階段を登って、職員室の辺りまで歩いてから、すぐに帰ったのだから。

入るのと逆の手順で塀を乗り越える。

「……結局、何だったんですか？」

「あの扉には警備システムが入っていないか、もしくは壊れているかだね。これは、明日にでも先生に言っておこう」

「いえ、それはいいんですけど」

彰一は頭を抱えた。何のために苦労して深夜の学校へ忍び込んだのか。

「確かめたかったんだよ」

と悠美香。

「何をですか？」

と琴穂。

「校舎内には入れることを。そして職員室には入れないことを」

「そんなの、別に実際にやってみなくても良かったんじゃないですか？」

「実施に勝る検査はないのだよ。それにね」

悠美香はいつもの微笑を浮かべる。

「夜の学校なんて、一回は入ってみたいじゃないか」

ああ、やっぱり。彰一はがくりと肩を落とした。

次の日、彰一はまた生徒会室へ呼ばれた。彼は携帯をいじることもなく、真っ直ぐ前を向いて入室した。

「よく来たね、もう皆そろってるよ。さ、座りたまえ」

皆、と言ったって、悠美香と琴穂だけだが。

彰一が座ると、琴穂がこっそり訊いた。

「先輩、連絡は大丈夫なんですか？」

「ああ、今日呼ばれることは予想できたからな。先にしといた」

琴穂は納得して頷いた。

「二人とも、良いかな？」

悠美香は軽く手を上げて注目を集める。二人が自分の方を見たのを確認し、生徒会長らしい威厳を含んだ声で——と少なくとも本人はそう思っている声で、二人の労をねぎらった。

「まず、彰一くん、琴穂くん、ご苦労だったね。おかげで今回の事件は解決したよ」

こういう一方的な、全く説明不足の言い様に、彰一と琴穂は慣れていたから、悠美香が言葉を加えるのを見越して黙って待った。予想通り、すぐに悠美香は説明を続けてくれた。

「二人とも、林田陽花という生徒は知っているかい？」

「いいえ？」

「はい」

彰一と琴穂は全く正反対の答えを返した。彰一が琴穂を見ると、彼女は説明してくれた。

「ほら、前に話した、携帯を取り上げられちゃった子ですよ。となりのクラスの」

「ああ」

「彰一くん、思い出したかい？」

「ええ、まあ」

別に忘れてたわけじゃありません、と言わないのが彰一だった。悠美香は満足気に頷き、説明を続ける。

「その子が二台の携帯を取り上げられた話は知ってるね？」

「はい」

今度は、彰一と琴穂も声を揃えた。

「しかし彼女、三台目は持ってなかったらしいね」

「.....でしょうね」

琴穂のような生徒は、当然少数派だろう。

「で、だ。現代の女子高生が携帯をすべて取り上げられたらどうなると思う？」

「どう、って.....困るでしょう？」

「仕事になりませんね」

と琴穂。仕事ってなんだろう、と彰一は思ったが、悠美香が続きを話したそうだったので疑問は胸の中に仕舞った。

「困るよ。私だって困るんだ、彼女はもっと困っただろうね」

この「私だって」の前には、まあ人それぞれ思った通りの言葉を補完しておくとう理解しやすかった。ちなみに彰一は「友達のいない」という言葉を付け加えて一人で深く納得した。琴穂は自分に当てはめて理解した。

「それで……ええと、その、話の流れから行くと……」

彰一は言い難そうに、しかしなんとなく悠美香がそれを求めているような気がしたので、先読みして言った。

「その、林田さんが犯人なんですか？」

「結論はそうなる」

そう言う悠美香は、不快そうではなかった。彰一はホッとした。

「自分の携帯を取り返すために、学校へ忍び込んだってことですね」

と琴穂。悠美香は頷く。

「そういうことさ。なんてことはない、単純な話だね。もっとも、彼女と特定するまでは大変だったけど」

「どう大変だったんです？」

別に訊かなくたって良かったが、そうですか、で流すのはあまりにかわいそうだったから、彰一は訊いた。これが逆の立場であれば、悠美香は頷くだけで済ませてしまったに違いない。

「まず昨日、琴穂くんにも手伝ってもらって、ここ一ヶ月の間に、昨日我々が使ったあの扉の鍵を、何か用事があって持ち出した生徒を全て調べたね。懐中電灯の光の具合からして、あの扉を侵入に使ったのは確実だったわけだから。もっとも、これはすぐに終わったけれど」

「一人もいませんでしたからね」

琴穂が小さく言う。

「いなかったんですか？」

「ああ。あの扉を生徒が使うことは皆無だからね」

「なるほど。それで、どうしたんです？」

「アプローチを変えたんだよ。全校生徒に、身長と足のサイズで振るい落としを行ったんだ」

「例の、足跡から解った情報です」

身長一五五センチ、足のサイズ二十三センチ、というのが悠美香が弾き出した数字だ。

「どうでした？」

「人数的には少なくなかったよ」

「ほとんどが女子でしたけどね。私や先輩も入ってましたし」

「誤差を、身長でプラスマイナス五センチ、足のサイズで一センチにしたからね」

それはつまり、平均的な数値ってことじゃないか。彰一はその捜査方法にやや疑問を抱いたが、悠美香が解決したと言ったのだから、大人しく続きを聴く。

「で、まあ、その中から動機がある生徒を探ったんだ」

「動機って……夜中に学校へ忍び込む動機、ですか？ 普通は無いでしょう？」

「ま、どんな生徒でもそういうことをする可能性が無いわけじゃないんだよ。ただ、蓋然性が低くて、無視して構わない数値なだけさ。でもまあ、私は辛抱強くそれらの生徒の動機を調べたんだよ。あ、これは私一人でやったんだよ」

「……はあ」

としか彰一は返せなかった。別に手伝わなかったことに文句を付けているようでもないし、かといって誇っているとも思い難かった。

「それで、どうだったんです？」

「この場合、問題は鍵だろう？」

「ええ、まあそうですね」

「彼女が合鍵を作ったことは間違いない。鍵掛の鍵を盗むのは容易いけど、夜には全て揃ってる

ことを確認するから、職員室に入ってる間に盗みだして、合鍵を作って、すぐに返したんだろうね」

「先輩と同じように、ですか？」

「まあ、そういうことだね」

「なんか本格的な犯罪みたいですね」

「犯罪だよ、厳密にはね」

何を言っているんだい、みたいな態度を取る悠美香だったが、同じ事を昨日自分たちもしたことには触れなかった。

「それで、だ。わが校から一番近い合鍵屋はどこか知ってるかね？」

「駅前のデパートの一階ですか？」

琴穂が言う。悠美香は小さく拍手した。

「その通り、あそこだ。あの小さな店だよ。私は林田さんの写真を持って、店主に会いに行ったのさ」

ついでに自分が盗みだした同じ鍵も持って行ったのだが。

「それで、どうでした？」

「当たりだった。彼女は合鍵を作っていたよ。日付と時間を聞いて、ついでに私の分の合鍵も作ってもらって、今度は学校の職員室で、先生たちに、その時間の前後に林田さんが来たかを確認したよ」

「それも、予想通りだったんでしょう？」

「言うまでもないことだけどね。で、そういう諸々の証拠を集めて、直接林田さんに会いに行ったわけだよ」

「会ったんですか？」

また重要な事を小さく言われてしまった。悠美香はポケットに手を入れ、中から出したものを机上に投げた。それは一本の鍵だった。

「こいつは、回収しないと不味いだろう？」

「——それじゃあ」

彰一は言う。

「これで解決ですか？」

「ま、そういう事かな。担任の教諭も、今日ちゃんと携帯を返してあげたようだしね」

「あ、それじゃあ本当に解決じゃないですか」

林田から動機がなくなるわけだから、この事件はこれで終わりだった。

「それにしても……ちょっと考えれば、学校の中には入れても、職員室の鍵が閉まっているなんてこと、わかりそうですけどね」

彰一は呆れて言った。危険を冒してまで忍び込んで、結局何の収穫も無く帰るなんて、馬鹿みたいじゃないか。そう考えてから、昨日の自分たちを思い出した。……あれは、先輩の命令でやったんだから別にいいんだ。

「たとえそうでも、居ても立ってもいられなかったんだろうね。それほど大切なものだったんだろう」

「ちょっと理解できませんね」

「他人を理解するなんて、軽々と言うものじゃないよ」

それを言う悠美香の事を考えると、なるほど、この言葉は確かにその通りだと思えるのだ。

「それで、先輩、他に案件はあるんですか？」

琴穂が訊いた。悠美香は少し考える。

「うん……いや、今のところは無だね」

「じゃあ、今日はこれで解散ですか」

「うん？」

悠美香は微妙に不機嫌そうな表情を作ったが、しぶしぶと頷いた。

「ま、そういうことだ」

「じゃあ、すいません、俺今から部活に行きますね」

と彰一は鞆を持ち、立ち上がった。昨日よりも早く着けそうだった。

「彰一くん」

出口へと向かう彰一を、悠美香は呼んだ。

「はい？」

彰一が振り向くと、悠美香は難しい顔をして、

「携帯は持ってるかい？」

と訊いた。

「ええ、まあ」

今まで何度も電話を掛け、メールを送信してきたのだから、当然知っているはずだった。悠美香は彰一から視線を外した。考えるような表情で、重ねあわせた手を細かく摺り合わせる。それからまた彰一を見据えた。

「電源を切ったり、着信音を消したりしないようにね」

「え？ 何ですか？」

「緊急の連絡が行かなかったら困るだろう」

悠美香のこの言葉に、彰一は、部活の最中に呼び出されるの嫌だな、と思っただけだった。

「——はい、わかりました」

無論、口では素直に頷く。

「うん。それだけだよ」

「では、失礼しますね」

と彰一はドアを開け、生徒会室を出て行った。

悠美香はしばし頷いていたが、急に顔を上げると、携帯を取り出した。

「琴穂くん」

「はい？」

やはり携帯でメールを確認していた琴穂は、急に呼ばれて少し驚いた。

「せっかくだから、資料の整理をしておこう」

「はい……そうですね」

琴穂はメールソフトを終了させ、携帯をしまった。だが、次の悠美香の言葉には少し耳を疑った。

「人数が多い方が良さそう。彰一くんも呼ぼう」